多様な認知症の今とこれから 全12回

今回は、岩坪威先生のアルツハイマー病についての解説の3回目、最終回です。20年以上に及ぶ新薬開発の歴史を、抗体療法の発案者であるデール・シェンク博士の熱心な取り組みを中心に紹介していただきます。そして、完成を待たずに他界されたシェンク博士に改めて思いをはせておられ記述からは、研究者という立場を超えたお二人のつながりの深さが感じられ心打たれます。最後に、今後の研究には患者・家族の皆さんの理解と協力が不可欠と呼びかけられています。

第３回　認知症治療薬の開発：その現状とさらなる期待

東京大学大学院医学系研究科神経病理学分野教授
国立精神・神経医療研究センター神経研究所所長　岩坪　威

2022年11月29日、米国サンフランシスコヒルトンホテルの大ホールは満員になっていました。国際学会で、日本のエーザイが開発した、アミロイドβを脳から取り除く「抗体薬」レカネマブの治験結果が発表されたのです。世界247ヶ所で治験に参加した1795人の「早期アルツハイマー病」（症状が軽度認知障害から軽症認知症レベルで、脳のアミロイドβが上昇）ボランティアが点滴注射を月2回、1年半にわたって受けた結果、実薬群では脳のアミロイドが60％取り除かれ、認知機能と日常生活の障害が進むスピードが27％遅れた、というこれまでにない良い結果が紹介されると、満場から拍手が湧きました。解析チームに参加した私も、発表を見守りながら、研究の成果が患者さんに届けられるまでの長い道のりを思い返していました。

抗体薬のように、からだの免疫反応を利用して脳からアミロイドβを取り除く治療法が産声を上げたのは約25年前、やはりサンフランシスコでのことでした。エラン社のデール･シェンク博士は、開発したばかりの「ヒトのアルツハイマー病のように、脳にアミロイドβが溜まるモデルマウス」を使って、どのように薬を作ろうか議論していました。当時、感染症に限らず、がんや様々な疾患の治療に応用が始まっていた「ワクチン療法」をヒントに、シェンク博士が「ネズミにアミロイドβを注射したら、アミロイドが消えないか」という思いつきを口にしたところ、仲間の科学者たちには不評だったといいます。しかしシェンク博士は、「そうだねー、でもやって見てから考えようよ」と押し切って、研究を開始しました。

モデルマウスの脳には、アルツハイマー病の脳そっくりにアミロイドβが溜まってきます。ところが、毎月アミロイドβを背中に注射していたマウスの脳では、アミロイドβがきれいに消えていたのです。シェンク博士たちはただちに、アルツハイマー型認知症の患者さ

んで治験を始めましたが、6%に「自己免疫性脳炎」という副作用が起こってしまい、治験は中止されました。亡くなった方の脳を調べると、「アミロイドβにくっつく抗体」が血液中にできている人では、期待どおり脳のアミロイドも取り除けていました。当時の方法ではワクチンが余計な刺激を与え、脳炎の原因になったこともわかってきました。それならば、アミロイドを取り除いてくれる抗体を体の外で作って、注射すればいい! こうした発想の転換から、抗アミロイドβ抗体療法が進み始めました。

まず「バピネウズマブ」という抗体が軽症～中等症のアルツハイマー型認知症で試されました。アミロイドβは取り除かれるのですが、一部の患者さんに脳のむくみや小出血（ARIA;「アリア」と読みます）の副作用が現れました。脳の血管に溜まったアミロイドβを取り除くと血液成分がしみ出てしまうもので、十分にお薬の量が増やせず、治験は不調に終わりました。2010年代になってアミロイドを写し出すPETスキャンも普及し、少し早い段階の「軽度認知障害」から認知症発症直後の「軽症認知症」までの「早期アルツハイマー病」の患者さんを対象に治験が進みました。抗体薬「アデュカヌマブ」が試され、ARIAの診断や対応も向上し、十分な量を使えばアミロイドが取り除かれ、進行のスピードも抑えられることが分かりました。効能を調べる最終試験には、世界で2,700人の早期アルツハイマー病の人が2組に分かれて参加しましたが、2018年末に行われた中間解析で、このまま進んでも十分な効果が得られないとの予測が出て、中止と決定されてしまいました。ところが蓋を開けてみると、1つの組では進行が22%抑えられていたのに対し、他方では効果が見られないという微妙な結果だったのです。そうして今回、できかけのアミロイド線維を狙った抗体薬「レカネマブ」の治験が成功に至りました。さらに今年の5月初めには、米国の製薬企業イーライリリーが開発した「ドナネマブ」が早期アルツハイマー病で進行遅延効果を達成したと発表されました。

このように20年以上の歳月をかけて、ようやくアミロイドβ抗体薬に一定の効果が示され、患者さんのもとに届けられる道すじがつきました。その全てを見届けることなく2016年にがんでこの世を去ったシェンク博士も、天から快哉を叫んでいるに違いありません。

シェンク博士（左端）と筆者たち（2007 年エラン社研究所にて）

日本でも現在これらの抗体薬の審査が行われており、うまく進めば今年の末以降には、臨床実用できる可能性も出てきました。しかし薬を安全で効果的に使えるようにするためには、認知症をもたれる皆様と医療関係者が一丸となって、色々な準備を始めなければなりません。現在の薬の対象とはならない進んだ症状の方、あるいは症状のない超早期の方に対する治療法を編み出すことも喫緊の課題です。

私たち研究者は、一刻も早くよりよい治療法を提供できるようこれからも努力を続けていきます。そのためには、皆様に研究についてご理解いただき、興味を持ってご参加いただくことが最大の力となります。今回「ぽ～れぽ～れ」に拙文を連載いただけけたことが、そのきっかけの1つとなれば幸いです。

次月号は、和田健二先生（川崎医科大学）認知症を発症するまで経過は?（仮題）です。

本人登場
私らしく仲間とともに
No.212

山形県支部　土田（つちだ） 直子（なおこ）さん（73歳）

昨年山形で開催された全国研究集会に登壇した土田さんは、68歳の時、近所の脳ドックを受診してアルツハイマー型認知症の診断を受けました。「将来は5人に1人はかかる病気だから、と鷹揚に構えていましたが、徐々に闘いが始まり現在に至っています」と、いつも二人三脚で支え合っている夫の達夫さんによる聞き書きから紹介します。

（編集委員　松本律子）

「大量のピーマンが冷蔵庫にあるぞ～」

私はピアノ伴奏や花を育てるのが好きで、夫の退職後はのんびりとそのような生活が続くものと思っていました。診断を受ける5～6年前、「大量のピーマンが冷蔵庫にあるぞ」と、夫に言われました。夫も私も認知症に関しては何も知らず、自分たちとは縁遠いものと思っていましたが、セカンドオピニオンで受けた大学病院の診断結果が近所の「脳ドック」と全く同じだったので、いよいよ覚悟することになりました。

教会の礼拝演奏で異変が

私は10代後半から教会の礼拝奏楽を担当し、結婚式や披露宴の伴奏も幾度となくやってきました。ある日弾き始めるまで時間がかかったり、後奏を弾き忘れたりということが起こってしまい、ショックで、あれ程好きだったピアノに触れなくなりました。

夫と共に初めて参加した「家族の会」のつどいで、趣味や曲の種類を聞かれ、「ピアノ」「讃美歌」と答えました。「次回から弾いてくださいね」と言われ、再びその機会を得ました。

「直子さんと歌う会」と「サロン野の花」

教会の女性たちと「直子さんと歌う会」を我が家で始めて3年目になります。私のことを配慮してくれる温かい思いが伝わってきます。共に過ごす夫とは「笑い」は少なく「叱責」されることが大半ですが、ここでの「明るい笑いとおしゃべり」にホッとします。

「サロン野の花」で

また、月2回、教会が地域に開放している「野の花ホーム」でのおしゃべりタイム「サロン野の花」に参加しています。この時も「直子さん、伴奏して」と声がかかり、多くの方々からお褒めの言葉をいただくと嬉しくて、これからも弾いていきたいと思います。

全国研究集会で発表したところ・・・

この頃、夫にリードされないとほぼすべてのことが自分ではできなくなっていますが、昨年の発表後は、予想もしなかった大きな反響があり、驚いています。他県の方々から連絡や励まし、施設からの講演依頼という拡がりです。夫とのウォーキング、花植えは今でも続けていますが、一番の大きな楽しみは夫との旅行で、どこまでも行きたいと思っています。できれば海外に住む息子一家をもう一度訪問したい。これからも声を出して多くの方々と笑い合い、元気よく歌えたらと願っています。

情報コーナー

本人交流の場
（詳細は各支部まで）

北海道◉7月3日㊊13:15～15:30
本人のつどい→かでる2.7
宮城◉7月6日㊍・20日㊍10:30～15:00
「翼」→仙台市泉区南光台市民センター
山形◉7月11日㊋13:30～14:30
なのはな→篠田総合病院
茨城◉7月22日㊏13:00～15:00
本人交流会→ひたち野リフレ
埼玉◉7月15日㊏13:30～15:30
若年のつどい・上尾→社会福祉法人あげお福祉会
神奈川◉7月2日㊐10:00～11:30
本人と家族のつどい→横浜市二俣川地域ケアプラザ
岐阜◉7月1日㊏13:30～15:30
あんきの会→土岐市文化プラザ研修室
静岡◉7月11日㊋10:00～12:00
若年性のつどい→富士市ロゼシアター
愛知◉7月8日㊏13:30～16:00
元気かい→東海市しあわせ村
三重◉7月2日㊐13:30～15:30
若年のつどい→四日市総合会館
京都◉7月16日㊐13:30～15:30
若年のつどい→ハートピア京都
兵庫◉7月8日㊏13:00～15:00
若年性のつどい→神戸市立総合福祉センター
奈良◉7月1日㊏13:00～15:00
若年のつどい→奈良市ボランティアセンター
和歌山◉7月16日㊐13:30～15:30
若年性交流会→ひかりサロンりゅうじん
広島◉7月8日㊏11:00～15:30
陽溜まりの会広島→広島市中区地域福祉センター
徳島◉7月15日㊏13:30～15:30
縁の会→県立総合福祉センター
長崎◉7月11日㊋13:30～15:30
本人・若年のつどい→させぼ市民活動交流プラザ
熊本◉7月1日㊏13:00～15:00
若年のつどい→県認知症コールセンター

会員さんからのお便り

お便りお待ちしています！
〒602-8222　京都市上京区晴明町811-3　岡部ビル2F
「家族の会」編集委員会宛
FAX 075-205-5104
Eメール office@alzheimer.or.jp
https://bit.ly/45tj93i

このコーナーに寄せられたお便りの他、入会申込書、「会員の声」はがき、支部会報から選び掲載しています。

“ぽーれぽーれ4月号「介護体験」を読んで” 胃ろうの選択についての悩み

大阪府　Aさん（女性）

私の母も若年性認知症で、末期では食事が取れなくなり、私の決断で胃ろうをすることとしました。胃ろうをするか選択する段階では、総合病院の医師がそれとなく自然に見送ることをすすめているように見えました。というのも他に胃ろうをしている人がいるという情報も与えてくれなかったのです。だから、生きてほしいと思っている私の選択が意外に思われてるんじゃないかと重たい気持ちがしていました。ただ、生きていれば新薬がでるかもしれない、孫たちに会えるかもしれない、悪いことばかりではないと思いました。

「ぽ～れぽ～れ」の記事を初見の時はなんだか涙が溢れてきました。同じように悩まれ、悩み続けている方の生の声を聞くことができたように思いました。母は亡くなりましたが、今でも母に胃ろうをしたことがよかったのかと思います。本人がよかった、悪かったと言ってくれたら気が楽なのですが、それができない以上誰が何をいっても答えはでないと思います。記事のお母様もだれが何を言ってももやもやした気持ちは無くならないと思います。そうならばこそ、今の娘様の時間を大切に生きてほしいと思います。

心の支えです

岐阜県　Bさん（50歳台　女性）

70歳台の実母は2年前にアルツハイマー型認知症と診断されました。岐阜県支部の世話人さんや電話相談で大変お世話になっております。今こうして無事に前向きに過ごしていられるのは、ひとえに皆さまのおかげです。

兄弟も身内も頼れる人がなく、もちろん介護の経験もなく、相談もできずボロボロだった私を全て受け止めてくださったのが、皆さまでした。今でも頼らせていただいております。私の心の支えです。

電話相談の際いただいたアドバイスで、母の引っ越し、妄想トラブル、訪問看護に繋げることが無事すみました。それでも、何かあるとすぐに悩んでしまうのが、私の悩みです。

認知症の自覚がなく…

千葉県　Cさん（60歳台　女性）

父は亡くなり、80歳台の母は自宅でひとりで生活しています。認知症の自覚はなく、「何でも自分でできるから大丈夫」と拒否しがちです。現在、週2回半日のリハビリデイサービスと、週1回のヘルパー（服薬管理・確認）を利用しています。服薬はお薬カレンダーを使っていますが、自分で袋からだして飲んでしまったりして、不足気味です。不審者（実際にはいない）に対する被害妄想も多いです。

気持ちを整理していきたい

群馬県　Dさん（40歳台　男性）

認知症を患う実父と高齢の祖母を世話していた実母が長期入院することとなり、長男である私がテレワークをしながら、ふたりの世話をすることになりました。実父の認知症症状は在宅生活に支障が生じる状況となり、グループホームへ入居することになりました。入居後すぐに他者への迷惑行為があるため、精神科への入院を勧められました。入院後3週間程で実父は亡くなりました。お世話をする状況が、一緒に過ごす時間をくれたと考えることもありますが、その時々でいろいろな選択を迫られ、決断したことが良かったのか悪かったのか、まだ整理がつきません。

認知症について学ぶことで考えや気持ちを整理していきたい。少しでも同じような苦しみを持つ人の役に立てることがあれば、やっていきたいと思っています。

認知症の症状が顕著に

石川県　Eさん（70歳台　女性）

夫は5年前に若年性アルツハイマー型認知症と診断されました。当初は軽度と言われましたが、新しいことが覚えられない、物忘れが顕著、それに加え、暴言を伴う暴力的行動が目立ってきました。腹を立てると、雨天や雪降る中でも、たとえ夜中でも戸外に出て行ってしまうことが増えました。主治医に相談し、薬が追加処方され、今は落ち着いています。

進行が止まらず…

東京都　Fさん（70歳台　男性）

妻は7年前、63歳で若年性アルツハイマー型認知症と診断されました。専門の精神内科で継続して治療してもらって、投薬も続けています。進行が止まらず、当人が一番かわいそうですが、それを見ている私は、体力や疲れはそれほど苦にはなりませんが、寄り添っていると、かわいそうで、精神的に非常に苦しく、最近は自分の限界を感じてきました。

ちゃんと回っているとは言い難い

茨城県　Gさん（50歳台　男性）

今年に入ってから、さらに父の認知症症状が進んだ感じがあります。それでも本人に自覚はなく、再三の説得にも車の運転をやめようとはしないので、かわいそうですが車のキーを取り上げ、運転させないようにしました。今はレンタルの電動車椅子（介護保険なし）で気分を紛らわしてもらうようにしていますが、とにかく運転を諦められず、何かにつけ、車のキーを家に置いていくように話をもっていこうとします。デイサービスは体験には行きましたが、拒否されてしまいました。

母はパーキンソン病で身体が思うように動かなくなってきていますが、頭はハッキリしています。元々とても働き者だったため、やりたいことが多く、命令的な指示が次々と飛んできて、これはこれで大変です。そして、そのやってほしいことを父に向けた場合、簡単には伝わらないため、さらにストレスをためてしまう悪循環。その母も父とは別に電動車椅子（介護保険利用）をレンタルし、これは母もとても喜んでいる様子です。

そして、私は長男の独り身です。個人事業を行っていて、従業員もいます。ひとりでふたりの病院通いから、自分の仕事の出張まで、田舎には使える制度がほとんどなく、正直、ちゃんと回っているとは言い難い状況です。母も含め、相談にのっていただいたり、話を聴いてもらえる場があると心強いかと思っております。

※お名前はイニシャルではありません。年齢は「50歳台」等で表記しています。

G7とC7の取り組み

「家族の会」と国際アルツハイマー病協会の活動について

日本が議長国を務めた主要 7 カ国首脳会議（G7 広島サミット）が 5 月 21 日閉幕しました。「家族の会」は、国際アルツハイマー病協会（ADI）とともに、専門機関や市民の立場から G7 首脳に提言を行うために G 7の中に設置されているエンゲイジメント・グループの一つ C7（Civil 7）のメンバーとして昨年 10 月から活動してきました。感想も含め、その概要を報告します。

（国際交流専門委員　鷲巣　典代）

C7からG7への政策提言書作成と岸田文雄首相への手交

C7 には核廃絶、環境などさまざまな分野の 72 か国 700 人におよぶ国内外の当事者や支援団体が参加していますが、「家族の会」と ADI は国際保健に加わり G7 首脳への提言書作成の作業に取り組み、次の4点を入れるように主張しました。

①高齢化と認知症を地球規模の緊急課題とする。②G7 の責務として急速な高齢化を迎える発展途上国を支援する。③予防、治療だけでなく高齢者、認知症の人との共生社会を推進する。④日本が、この分野におけるリーダーシップを発揮する。

感染症や環境など他の分野の主張も国際保健にとって不可欠なものばかり。限られた文字数の中で重要事項をすべて表現するかをめぐってオンライン会議が繰り返され、「高齢者」、「認知症」についての記載も含む提言書が完成、4 月 12 日に C7 の共同代表が岸田文雄首相に手交しました。

C7東京サミット

4 月 13 日・14 日に国内外のメンバーが参加して、政府代表者との意見交換やシンポジウム開催。ADI からはアジア太平洋地域事務所の DY・スハルヤさんが来日して、発表したり、座長を務めるなどしました。

発展途上国の参加が重要視される中、DY さんの活躍は注目を集めました。

広島市民サミット

4 月 16 日には G7 に向け日本の市民団体の力をさらに高める目的で行われた広島市民サミットで、国際保健グループの仲間であるアジアアフリカ協議会と「家族の会」本部、広島県支部が分科会を共催し、広島大学石井伸弥特任教授とDYさんがコロナ禍による高齢者や認知症の人への影響について講演しました。広島県支部の皆さんの尽力によって実現した企画です。

G7長崎保健大臣会合記念シンポジウム

5 月 13 日・14 日に開催された G7 長崎保健大臣会合の大臣宣言の中に、高齢化と認知症が課題として取り上げられたことは、この分野で日本のリーダーシップが発揮された結果です。

5 月 14 日には、厚生労働省主催、日本医療政策機構、世界認知症審議会協力による記念シンポジウム～新時代の認知症施策推進に向けた国際社会の連携～に鈴木森夫代表と ADI 本部のパオラ・バルバリーノ CEO とクリス・リンチ副 CEO が参加し発表しました。日本の認知症医療をリードする専門医の先生方、本人の代表として藤田和子さん、丹野智文さん、田中豊さん、当事者団体、国際組織のメンバーが一同に会して話し合う様子は、まさに「共生と連携」が、形となって目の前に広がっているかのようでした。

G7広島サミット

5 月 20 日に発表された首脳宣言の中に、認知症の人々へのケアと治療薬開発の推進が取り上げられたことは、日本での開催のひとつの成果であったと思います。

5 月 18 日～21 日にG7サミットのために開設された、国際メディアセンターと NGO スペースに、「家族の会」と ADI として私が参加。

国内外の NGO とともに記者会見や他分野との交流を行いました。この4日間の活動を通して、市民の力がこれほど必要な時代はないことを痛切に感じました。同時に、地球全体が様々な危機に直面している中で、よりよい世界を目指してそれぞれの分野で真摯に取り組んでいるすばらしい人たちの存在に感動し、力と希望をもらいました。

そして、認知症の課題は認知症だけの分野では決して解決できないことを再認識する機会でもありました。

レガシーイベント

5 月 28 日、日本医療政策機構の主催で、認知症に関する最新の取り組みや今後の展望について「共生」をキーワードに多角的な視点で考えるためのレガシーイベントが開催され、「家族の会」から川井元晴山口県支部代表、村上敬子広島県支部代表、私が発表しました。多分野において「共生」について検討が深められつつあることを心強く感じました。

G7 保健大臣会合宣言と首脳宣言の中で「認知症」が明記されたことは、今回の成果のひとつです。けれども、ここが出発点でもあります。

宣言を言葉に留まらせず、認知症の人と介護者のよりよい暮らしの実現につなげることは、各国政府の責任であると同時に、私たち当事者団体、市民一人ひとりの役割でもあります。「家族の会」が日本の当事者団体として、また ADI のメンバーとして、世界共通の課題「認知症」にどのような働きをすべきかを、今一度確認すべき時であると感じています。

支部のみなさんの国際交流活動

G7にはエンゲイジメント・グループという政府から独立した立場からそれぞれの専門領域についての提言を行う仕組みがあり、8つの団体が公式に認められています。

今回のG7においては、「家族の会」と国際アルツハイマー病協会（ADI）はその中の一つであるC7（Civil7）の国際保健のグループに参画し、昨年12月から、国内外のメンバーとともに、提言書の作成、政府関係者や他のメンバーとの会合、メディアへの発信等の活動をしてきました。

このような経過から4月にはADIアジア太平洋地域事務所代表のDY・スハルヤさんとインドネシアアルツハイマー協会のカタリナ・サザリアさん、5月にはADI本部のパオラ・バルバリーノCEO、クリス・リンチ副CEOが来日し、支部の皆さんとの交流を深めることができました。

4月16日　広島県支部

G7やC7サミットを機会に国内の市民団体の力を盛り上げようとの目的で開かれた「広島みんなの市民サミット」で分科会「新型コロナが映すいのちの格差」を国際保健グループのメンバーであるアフリカ日本協議会と「家族の会」本部、広島県支部で共催し、広島大学の石井伸弥特任教授とDYさんがコロナ禍が認知症の人と家族に与えた影響について講演しました。

村上敬子広島県支部代表はじめ、支部の山内雅弥顧問や世話人の皆様のご尽力で、広島大学や中国新聞の協力を得ることができました。また、当日の会場運営支援にも感謝しています。

4月18日　京都府支部

東京のC7サミットに参加したDYさんとカタリナさんが広島での講演に向かう途中で京都に。「家族の会」本部事務局に立ち寄った後、京都府支部の皆さんとカフェで、ミニ交流会をしました。親の介護は誰がするのか？協会の活動は誰が担っているのか？それぞれの介護体験等の話題が続き最後には、歌まで飛び出して、にぎやかで楽しいひと時を過ごしました。

5月14日　長崎県支部

G7保健大臣会合記念認知症シンポジウム（厚生労働省主催、日本医療政策機構（HGPI）、世界認知症審議会の協力）にADIからパオラCEOとクリス副CEOが出席。神原千代子長崎県支部代表の提案で二人をサプライズで歓迎しようということになり支部世話人が空港で待機、何も知らずに出てきた二人をのぼりと横断幕、オレンジベストの世話人10数人が出迎えました。30時間もの長旅で疲れて出てきた二人でしたが、思いがけない歓迎に大きな笑い声をたてて大喜び。そして、市内へのバスに乗った二人を雨の中、最後まで全員で見送ってくださった皆さんのやさしい笑顔が二人の心に深く残ったようです。

今回の活動を通じて、支部の皆さんのパワーと温かさ、豊かさを改めて深く感じました。また、海外からの4人も、『日本の「家族の会」の活動の原点に触れた』と感慨を語っていました。

日頃の支部活動の中で国際交流の機会はあまり多くないかもしれません。しかしながら、認知症は地球規模の課題。目的を同じくする仲間として、海外とのつながりを全国の支部の皆さんといっしょに作っていきたいと考えています。

地球家族パートⅡ　今月は休載です

全国の「家族の会」支部会報から活動を紹介!!

いきいき「家族の会」

まちでも むらでも

編集委員／井垣 敦

岡山県支部 岡山市家族介護教室

1月18日岡山県きらめきプラザにて、支部会員でもある理学療法士の越智壽美江氏を講師に「日常生活での介護方法について」と題して、移動・移乗の方法を学び日常生活での介護に役立てるという内容で、理学療法士の立場から、介護者の身体的な不安を少なくするためにボディメカニクス（運動機能である骨格・関節・筋肉などの力学的相互関係）の原則を応用した実技指導の講義をしていただきました。

ボディメカニクスを活用した動作は、効率が良く、消費エネルギーが少なく無理のない動作なので、介護者の疲労の蓄積、腰痛の危険等を避けることができ、要介護者にも不安や苦痛を与えず、スムーズで優美な介護が可能になります。

参加者からは、「資料だけでなく移動や移乗の実技指導をしてもらいながらの研修で役に立った。介護される側に立つとちょっとした心遣いや動作が快・不快につながることも体験できた。これからも実技指導を取り入れた講義をしてほしい。と大変勉強になったとの声が多く寄せられました」との報告がありました。

熱心に聞き入る参加者

千葉県支部 嬉しいお手紙をいただきました

総合的な学習の時間の中で「共生社会」について学んでいる松戸市立小金小学校5年生の須賀祐仁さんから千葉県支部に、認知症についての質問をいただきました。世話人それぞれが感じていることをまとめて送らせていただいたところ、お礼のお手紙が届きました。

須賀さんからは、「良い発表ができました。認知症は知っているほうだと思っていましたが、いろいろな発見があり勉強になりました。皆さま、これからも頑張ってください」と嬉しい内容のお返事でした。

担当の先生からは、わかりやすいお話で、児童は大変喜んでいました。ネットや本で調べるだけではわからない、生きた知識を得ることができました。と感謝の意をいただきましたと報告がありました。

発表の様子